

支部だより

北海道支部からのたより

はじめに

2007年の学会誌リニューアルを機に新設された「支部だより」も、いよいよ3巡目へと突入します。各支部（地区）が2回ずつバトンをつないできた約3年間で、セミナー／シンポジウム報告と研究室紹介の2つをメインピックに据えた記事のスタイルが確立されつつあります。そこで、執筆依頼を受けた時点では、私も前例に倣った記事を執筆するつもりでした。しかし、どこからともなく「支部だよりの記事内容がマンネリ化している」という声が…。かといって、「具体的にこれを書きなさい」という声は残念ながら聞こえません。何を書くべきか悩んでいたところ、ちょうど本号の「若手の声」も北海道支部に執筆依頼が来ていることを知りました。これを使わない手はありません。早速「若手の声」執筆担当の田村和志さんにコンタクトをとり、共通の話題をそれぞれの立場（教員と大学院生）で執筆するという、新しい試みを行うことにしました。

今回の「支部だより」では、前半に支部の活動報告を短くまとめ、後半に「夏の学校」の北海道開催に向けた取り組みを教員目線で書きました。「若手の声」には、同じ話題が学生目線で書かれていますので、是非両者を読み比べてみてください。

2008年度日本生物物理学会北海道支部例会

恒例の支部例会が2009年3月9日に北海道大学工学部で開催されました。この例会は、年に一度北海道支部の会員が一堂に会するイベントとして、35年近く継続して開催されてきました。当日は、札幌はもとより旭川や室蘭からも多数の参加があり、学部生、大学院生、ポスドクといった若手を中心に24件の研究発表が行われました。その中には、今回はじめて高校生を中心とした研究グループの発表も含まれていま

す。どの演題も非常にレベルの高いものでしたが、特に優れた発表を行った喜多俊介（北大院・生命）、樋口真理花（北大院・先端生命）、井上郁（北大院・理）の3名に発表賞が授与されました。また、3月末で北大を退職される加茂直樹先生（現、松山大・薬）には、特別講演を行っていただくとともに、長年にわたる支部活動へのご尽力に対して、懇親会にて花束を贈呈しました。

昼休みの支部総会では、2008年度の活動報告や会計報告が行われました。また、郷原一寿支部長（北大院・工）の任期満了に伴い、次期支部長として出村誠先生（北大院・先端生命）を選出しました。4月から新体制での支部活動がスタートしています。

2008年度合同シンポジウム

「生命現象の分子レベルでの解明」

こちらも恒例の生化学会北海道支部、北海道分子生物学研究会との3団体共催による合同シンポジウムが2008年11月21日に北海道大学理学部で開催されました。10年にわたり継続しているこの合同シンポジウムでは、半日をかけて各団体から2件ずつ計6件の講演が行われます。2008年度は、内田毅先生（北大院・理）が世話人を、高井章先生（旭医大・生理）と石森浩一郎先生（北大院・理）が講演を担当されました。本シンポジウムは、北大の大学院共通授業科目を兼ねているため、大学院生の聴衆が非常に多いのが特徴です。聴衆の中から、「生物物理」そして「ライフサイエンス」の将来を担う若手研究者が1人でも多く生まれることを期待します。

2009年度合同シンポジウムは2009年11月13日に開催されます。現在、坂井直樹先生（北大院・先端生命）を世話人として、開催に向けた準備を進めています。今号が発行される頃には、盛会のうちに終了していることでしょう。



加茂先生への花束贈呈（支部例会懇親会にて）

その他の支部活動

上述の大きな2つのイベントに加え、年間を通じて支部講演会の主催やシンポジウムの共催を行っています。すべてのイベントの開催案内やプログラムは、支部ホームページ (<http://altair.sci.hokudai.ac.jp/biophy/>) に随時掲載するとともに、メーリングリスト（現在、約170名を登録）を通じて案内しています。支部主催のイベントには北海道に限らず全国からの参加を歓迎します。また、押しかけセミナーなども大歓迎です。興味をもたれた方は、是非一度ホームページをご覧の上、支部事務局へのコンタクトをお願いします。

若手研究者へのサポート

～「夏の学校」北海道開催を通じて～

2006年4月、とある先生から私に対し「北海道支部の若手活動を盛り上げるように」という特命が下ったのがすべての始まりでした。当時、若手の会に北海道支部は存在せず、北海道から夏の学校に参加する学生もほとんどいませんでした。つまり、支部の若手を主体とした活動はまったくゼロの状態です。このような状況からわずか3年半で夏の学校を北海道で初開催するにいたった経緯を書くことで、同じように若手活性化に取り組んでいる他支部の参考になれば幸いです。

まず、最初に手がけたのは、北海道支部に所属する教員に理解・協力を求め、このような活動に積極的な学生・ポスドクを集めることです。もしこれで人が集まらなければ、教員を説得するところから始める必要がありましたが、多くの教員の協力により20名前後のメンバーを集めることができました。集まったメンバーに対し「今後どのような活動を行うかを自分たちで決め、それを実行すること」、「3年以内に夏の学校を誘致すること」の2点を支部からの要望として伝えました。早速、メンバーによる話し合いが行われ、まずはメンバー同士の相互理解を深めることおよび新メンバーを獲得することを目的として、研究室紹介セミナーを定期的に開催することが決まりました。2006年度には4回のセミナーを実施しましたが、最初から学生・ポスドク主体の活動として軌道に乗ったわけではなく、実際はかなりの部分が教員のコーディネートによるものでした。また、ちょうどこの年の沖縄年会で「若手の会全体会議」に参加する機会があり、活動が軌道に乗っていないにもかかわらず、「夏の学校の北海道開催」を提案しました。このいきなりの提案を「若手の会」があたたかく受け入れてくれたことによ

り、2009年の北海道開催が現実味を帯びてきました。

2007年度は、「教員が手を引き（手を抜き？）、学生・ポスドク主体の体制へ移行する」ということを目標としました。しかし、研究室紹介セミナーに代わるイベントが立ち上がらず、一時的に活動が停滞したように思います。本当に夏の学校が開催できるのか？という不安がよぎりましたが、ここで手を出してしまうと最後まで教員の手を離れないという心配のほうが大きかったため、彼らのポテンシャルを信じ、あえて静観しました。結果的に、彼らにもこのままではまずいという危機感が芽生えた時期ではないでしょうか。また、若手の会との連携が不可欠であるため、北海道から夏の学校へ参加する学生・ポスドクに対し、北海道支部が旅費・参加費を補助するシステムを立ち上げました。

そして2008年5月、とうとう完全に学生・ポスドクの手によるイベントが、これまでで最も多い参加者を集めて開催されました。個人的に肩の荷が下り、夏の学校の成功を確信した瞬間でした。実際、これ以降は学生・ポスドクが主体となった活動が展開され、教員の仕事はイベントに参加して呑み会のお金をすこし多めに出すことだけででした。また、この年の夏の学校（東京）には、参加費補助を活用して北海道から多数の若手が参加し、若手の会全体会議において2009年夏の学校の北海道開催が正式決定となりました。

その後1年の準備期間を経て、夏の学校が半世紀の歴史で初めて津軽海峡を越えた北海道の地で開催され、無事に大成功を収めました。同時に、北海道支部の悲願が達成した瞬間でもありました。今後は、このように急激に盛り上がった若手の活動をいかにして持続・発展させていくかが課題となるでしょう。次なる展開を大いに期待するとともに、支部として積極的な若手の取り組みを全力でサポートしていきます。

教員目線では、このように順調に目標が達成され、支部若手活動の活性化を実感しています。一方、学生目線では、この3年半をどのように感じているのか？次ページからの「若手の声」を是非ご覧ください。

最後に、夏の学校開催という目標を見事に達成してくれた北海道支部の若手メンバー、その活動を支えてくださった北海道支部の教員、あたたかく迎え入れてくれた若手の会メンバーに対し、この場を借りて厚く御礼申し上げます。